
泥濘の花

涼暮紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泥濘の花

【NNコード】

N4848Y

【作者名】

涼暮紫苑

【あらすじ】

拙宅”Lost Soul”にて連載しております。

<http://biancaneve191.blog.fc2.com/>

地獄に引きずり込まれた生者の少女と記憶を無くして彷徨い続ける地獄の案内人のお話です。

§1（前書き）

あなたの耳元で囁く声がしませんか？あなたを奈落へと誘う手が見えませんか？ええ、きっと聞こえないでしょ。ええ、きっと見えないのでしょ。

私は仮面をつけ踊っているのです。愚かな獣とあなたを嘲笑いながら。私の姿が見えたとき、あなたは私の虜となるでしょ。

私に肉体を委ねなさい。私に精神を預けなさい。

「ここにお集まりの紳士淑女の皆様方、

今宵の悲劇、とくとくご覧なれますよ！」

あなたは、ほら、私の声が聞こえるでしょ。あなたは、ほら、私の手が見えるでしょ？

ようこそ、快樂の花園へ。今宵、私はあなたを離しません。あなたを絶望の色に染めて差し上げましょ。今宵、私とともに円舞を。あなたを踊り狂わせて差し上げましょ。

さあ、御手を拝借…

私は、ある街で不思議な人々に出会った。そこはいつも通る見慣れた街なのに、なぜかその日は違和を覚えた。私の目の前を通り過ぎる数多の人々の中に、私を見つめる6つの瞳があつた。胸を大きくはだけさせた、容姿端麗な男が艶めかしい視線を私に送っている。豹のような妖しい色気を放つ男のすぐ側には、きつちりとした服装に身を包んだ男がこちらを見ていた。如何にも権力を牛耳つていそうな男は、まるで獅子のようだつた。そして、狼のように鋭い視線で私を睨みつけている女がいた。派手な格好をした、その女は何が氣に食わないのか、鬼の形相で私から目を離さない。彼らは何者なのか。私は、恐ろしくなつて来た道を引き返そうとしたその時だつた。

「ここにちは、お嬢様。あなたは私が見えるのですね」

雜踏の多い街中で、私はその場に似つかわしくない男に後ろから声をかけられた。振り返ると、その声の主は奇妙な出で立ちをしていた。一言で言い表せば、まるで中世仮面舞踏会に出てきそうな男だつた。その男が私に向かつて手を差し出している。

「あなたは、この欲深き人間の堀堀の中の一人にしては、何とも珍しい。目の前の欲の塊を自ら払いのけるとは。実に、面白い」

男の顔は仮面に覆われているはずなのに、私を視線が貫いていた。私は逃げたくても逃げ出せない、金縛りにかかつたかのようだ。前後から迫る恐怖に硬直していると、男は優雅な手つきで指を鳴らした。ぱちん。その音が鳴ると同時に、私を背後から射抜いていた視線が消えた。

「あなたは、選ばれたのです。御手を拝借してよろしいですか。私がお連れしましょう。あなたの魂がいざれ帰るところを」

「あなたは、誰なの」

「私は人間ではありません。ですが、かつて人間だったことはあり

ます」

男は不気味な笑みを浮かべると、私の手を恭しくとり街中を歩いた。こんなにおかしな光景なのに、誰も気づいていない。私は、声を出しきることができなかつた。

「不思議がることはありません、お嬢様。あなたしかこの私は見えていないのでですよ」

人の心が読めるのだろうか。男は私の手を取り、黙々と喧騒の街を抜け、裏路地へと入つて行つた。人影はまるつきり途絶え、黒猫すらいない。私は、自分の歩むべき道から足を踏み外して取り残されたような孤独感に襲われた。まだ、人生の半ばにすら届いていないというのに。私はこのままどうなつてしまふのだろうか。そんな考えを逡巡させていると、男はある古びた重々しい雰囲気のする家の扉の前で立ち止まつた。

「力ロン。娘さんを一人お連れしました。船の準備をお願いします」男はノックをして扉を開けると、誰かを呼んだ。ここは、川も海もない街なのにどうして船なんか出すんだろう。じりじりと襲う不安と恐怖。

「こんなところで恐怖なんか感じてたら、この先はもつと大変ですよ、お嬢様」

耳元で男は囁いた。

「この先で力ロンが船の用意をしてくれています。さあ、行きましょう」

私は男の手を振り払おうとしたが、それは虚しく終わつた。そもそも男は私に触れてはいなかつた。見えない糸で操られているような感覚を味わつていただけだつたのだ。

「私の手袋が罪に汚されますからね。そんなことせずとも、お嬢様は私に身を預ければよいのです」

投げかけられる仮面越しの冷たい視線。ひたすらその視線は私の心を抉つっていた。

「この先で朽ち果てたいならば、私を殺しても構いません。逃げる

ことは叶いませんよ。それとも、元の世界に戻りたくないのですか」

私は、条件反射のように首を振り、観念して男に従うことにした。私が上を見上げると、扉の上方には一編の詩が彫られていたが、私は解読できなかつた。

”Per mesi vanne la citt? dole
nte, per mesi vanne l'eterno
dolore, per mesi vanne la p
erduta gente. Giustizia mosse
il mio alto fattore; fecemi la
divina podestate, la somma sa
penza e'l primo amore. Dinan
zi amem non fuor cose create
e non etterne, e io eterno du
ro. Lasciate ogne speranza, vo
i ch' intrate”

「Jの門をくぐる者は一切の希望を捨てよ、といつてございま
す。死の希望さえもここでは望めないです」

男は静かに呟いた。私は、驚愕と絶望の雷に貫かれたような錯覚を
覚えた。しかし、もう戻ることはできないと私の本能が告げている。

「どこに向かうの」

「魂がいざれ帰る場所、死後の世界とでも申しましょうか」

私が男と共に扉を潜ると、そこには鬱蒼とした森が広がつていた。
光を通さないほど、生い茂る木々。私は、男のあとを恐怖に打ち震
えながら歩いた。木々に巻き付くようにして私の行く手を阻む荆が
私の服を破り、露わになつた柔肌を削る。大木の根元に点々と無造
作に転がる死屍。その躯は腐つて強烈な異臭を放つていた。まだ辛
うじて外見を保つている体には、大量の虫に刺された跡が見て取れ

た。鼻を劈くような死臭に耐え切れなくなつて、思わず私は膝をついた。男はさぞ面白がるように私を見つめている。

「無為に生きて善も悪もなさなかつた亡者は、地獄にも天国にも入ることを許されず、ここで無数の蜂や虻に刺されるのですよ。何もせずに生きることもまた、ここでは罪なのです。あなたが今、膝を落としている地面さえ、それは長い時を超えて死者の肉体が形成した大地なのです。これこそまさに、母なる大地」

恍惚の表情を浮かべ、手を胸にやる男。その仕草はまるで、聖者に祈りを捧げる仕草に似ていた。彼の不釣り合いな行為にあいまつて、私は何度も吐き気に襲われた。死者の腐臭に満たされた森が、そこに横たわる屍が築き上げたものという事実。無為に生きることさえ、罪なのだという事実。私を睨みつけながら横を何度も通り過ぎる蜂や虻。生きていることが憎らしいのか、私を翻り殺すことができないことが恨めしいのか、私にはわからなかつた。森に生える大木の根に何度も躊躇そうになりながら必死で私は男のあとに続いた。

しばらくすると、森が開け、そこには大河が広がつていた。一つの橋もかかつてはおらず、ただ簡素な船着き場だけが存在していた。「ここは、アケロンテの川。生者と死者の袂を分かつ河川にござります。私がついているので心配はございません。あなた次第では戻れないこともありますけれど」

にこやかに話す男とは対照的に、私は急速に自分の中から体温が奪われていくを感じた。

「さあ、行きましょう。カロンを待たせると厄介ですからね。カロンがあちらの岸までご案内しますよ」

男に連れられ、私は船頭のカロンの乗る船へと乗り込んだ。

「ぼけつと突つ立つてんじやねえよ。ここは俺しかいねえんだ。あなたは特別にしろつて言つからな、こいつがよ。感謝しろ」

一気にまくしたてるカロンと呼ばれた男。全身は黒いローブに覆われ、表情をうかがいることは難しかつた。

「さつさと船、出すぞ。しつかり掴まつてねえと、川底に突き落と

すかもしけねえからなあ」

にやりと不敵な笑みを浮かべるカロン。その言葉の端からは、今まで彼が数えきれないほどの死者を櫂で突き落としてきたことが感じられた。

ゆっくりと動き出す船。

離れた岸には、大量の亡者が手を伸ばして絶叫をあげていた。

「煩くてしゃあねえよ、あいつら」

「まあ、そんなものでしょ。まさかこんな世界が待ち受けているなんて夢にも思つていなかつたでしょ。から」

「あんたも、こいつに引き寄せられるなんてな。不運な女だな」

「それでは、まるで私が死神みたいじゃないですか」

「何か相違でもあんのか?」

「間違つてはいませんがねえ」

私を挟んで交わされる会話からわかる、私に下された死の宣告。

「今まであんたが連れてきた奴ら、みんな発狂して死んでいっただいいじゃねえかよ」

「それは私の責任ではありません」

「無責任な奴。だから、言つただる。あんたに惹かれるなんて不幸な奴だつてな」

目を閉じて、私は自分を恨んだ。きっとそれさえもこの得体のしれない男の前では無意味なのだろう。ただ嵐が過ぎ去るのを待つしかない。そう思った時、船が岸に上がつた。

「着いたぜ」

「ありがとうございます、カロン。では、私たちはこれで」

「ああ」

「カロンも早くしないと、あの岸が迷い人であふれかえりますよ

「いちいちうるせえ野郎だな、わかつてよ。じゃあな」

手を振りながら帰つていいくカロン。少しだけ彼の人間らしさを垣間見た気がした。まさかとは思つたが、彼は人間だったのだろうか。

「彼も、もともとは人間でした。カロンもまた、この地獄で縛られ

ているのです」

思わず、あなたはと聞こいつとしたとき、男は遮るように口を開いた。
「私も、そうなのかもしませんね。気にしたことはありませんが」
男は指を鳴らすと、帽子を取り私に向かって深々と一礼をした。星
なき空がそこにはあつた。

「よつこそ。地獄へ。心行くまで私がご案内いたします、お嬢様」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4848y/>

泥濘の花

2011年11月17日19時01分発行